

# III

戦争や平和に関する文章



### 3-1 獄中証言

私は同信<sup>(1)</sup>の友渡部弥一郎氏<sup>(2)</sup>と共に1944年(昭和19年)6月12日早朝検事<sup>(3)</sup>の令状<sup>(4)</sup>により治安維持法<sup>(5)</sup>違反<sup>(6)</sup>被疑<sup>(7)</sup>にて拘引<sup>(8)</sup>山形警察署監房<sup>(9)</sup>に収容せられて、翌年2月12日まで満8ヶ月特高<sup>(10)</sup>課員及び検事の取調べを受けました。主イエスの為、また日本の為苦難に遭うことを喜び、勇躍<sup>(11)</sup>して家を出ましたが、検事は調べて見て罰することも出来ず、釈放することも面目<sup>(12)</sup>に関するか出来ず、処置に困ったらしく延引<sup>(13)</sup>致しました。初めの2週間はよく調べてくれましたが、係員の移動等もあって2ヶ月余りも調べなくなりました。7月2日に余り取調べがなく退屈でありましたので下<sup>(14)</sup>の歌を説明をつけて検事と特高課係員にやりました。

#### 獄中雑詠<sup>(15)</sup>

- 一、弱き我も御恵の主<sup>(16)</sup>に導かれ なはめ<sup>(16)</sup>の栄得しぞうれしき
- 二、獄外の友の祈<sup>(17)</sup>に支えられ 主への節<sup>(17)</sup>をば守り通さん
- 三、国民の乱れし思正されて 始めて<sup>(18)</sup>安し我が日の本<sup>(19)</sup>よ
- 四、国民の乱れし思正す為 このわが苦難主よ用ひ給え
- 五、アタナシウスコントラムンゾム<sup>(20)</sup>その如く われ独りにて闘<sup>(21)</sup>ひ抜かん
- 六、弱き我も御恵の主<sup>(22)</sup>に導かれ 祖国の役に立つぞうれしき

キリスト教的な特殊な言葉づかいがありますので説明を加えます。

- 一、戦争と不義とをもっと責むべきを、国法の為とは言え、責めないでいた弱き私も御恵溢るるイエスキリストの奇しき<sup>(21)</sup>御導きにより福音の証しを公に為し得るようになった喜びを述べました。
- 二、親類以外には留守宅でも特別に知らせないでしようが、伝え聞いた信仰の友人は祈ってくれますので弱き私にも信仰の為に闘う力が与えられます。
- 三、現下<sup>(22)</sup>の国難は国民の道徳の頹廢に由来しますが、特に天皇を神とする思想の結果であります。
- 四、すべてのよきことは犠牲によって生じます。特に私が声を大にして叫ばなくともこの苦難そのものが日本の救いに少しでも役立ちます。
- 五、「アタナシウス対世界」という意味のラテン語でニカイア公会議<sup>(23)</sup>の時アタナシウス<sup>(24)</sup>が全世界が反対しても自説をまげないといって勇敢に闘ったことから諺になりました。
- 六、四の所で述べた如く国の苦難を担って人知れず隠れて苦しむことは大政治

家の経綸にも勝って国の役に立ちます。

係員も初めから私共を尊敬して居ってくれました。東条首相<sup>(25)</sup>をどう思うかと聞きますから、こんな愚かな戦争を始めるような人は政治家としては零だと申しましたら、あんな偉い政治家をそんなふうにいうとはというような様子でありましたが、それから間もなくサイパン<sup>(26)</sup>が陥ち、東条内閣が瓦解致しましたので、だんだん先生のいうとおりになると感心して参りました。また係員らは近頃特高課の人々が病気を患って困る、これもキリスト教をいじめる罰だ等と申しましたから、私共は決して怨んでなどいない、却って貴方がたの為に祈ってやっていると申しましたら、そうかなと喜んで居りました。

東条内閣瓦解の報せを聞いた時はほんとうに嬉しく思いました。

獄舎にて祈りし祈り聴かれたり 祖国の為の熱き祈りを

小磯<sup>(27)</sup>内閣は戦争を止めてくれるかと思いましたが、止めず失望致しました。しかし東条よりはいくらかましであると思いました。

8月末に新たに係りになった高橋警部は大変よい人でよく調べてくれました。キリスト教のよいことをわかってくれたようであります。調べに対する答えを書いて出すことに致しました。主要事項は、

自分の信ずる神

偶像<sup>(28)</sup> 礼拝の意味、神社参拝との関係

神の目的とは如何なるものか

聖霊とは如何なるものか

悪魔の本質

世界の進展状況

キリスト教とは如何なるものか

無教会主義キリスト教とは如何なるものか

キリスト教の来世観、未来の裁判、復活、再臨<sup>(29)</sup>

キリスト教より将来の日本国家を如何に観るか

国体<sup>(30)</sup>を如何に観るか

キリスト教より神宮<sup>(31)</sup>を如何に観るか

天皇を如何に観るか

等でありました。世界の進展状況の項の一部を掲げます。

## 現在の世界 状勢の原因

第一次世界戦争後の国際情勢の不安が大きな原因であります。張作霖爆死事件<sup>(32)</sup>以来の日本の態度も原因になって居ります。張作霖事件を今も某重大事件としかいえず発表出来ない事は日本にとって悲しむべき事であります。満州事変<sup>(33)</sup>、すい遠事件<sup>(34)</sup>、日中戦争<sup>(35)</sup>と引き続き起こった日本にとって悲しむべき事件はまた世界情勢悪化にも影響致しました。日中戦争を防共<sup>(36)</sup>の為の戦と称しましたが実は共産主義助長になりました。漢口<sup>(37)</sup>陥落当時出ました日本の講和条件が残念なものであります。この時にもっと正しかったらこんな国難にあわないで済んだであります。この頃から防共の為の戦が中国民族解放の為の戦と看板を塗り変えられました。日中戦争の初めには英米はなだめ役をし独逸が蒋介石<sup>(38)</sup>を煽動する如き態度だったことも日本人は忘れてはなりません。独逸の将軍フォン・ゼークト<sup>(39)</sup>が漢口陥落まで中国の軍事顧問として日本と闘って参りました。

ポーランド問題は何といっても独逸側に非があります。ポーランド回廊<sup>(40)</sup>の如きものを作ったヴェルサイユ体制<sup>(41)</sup>も原因であります。それを訂正するのにもっと正しい道が独逸にあった筈であります。細かい点は忘れましたが、私は当時自分で調べられた双方の言い分を検討して独逸側が悪いと結論し、私は持論である科学的経済的判断よりも道徳的信仰的判断の方が正確であるという考えにより、当時日本のすべてが独逸の圧倒的勝利を確信して居りましたにも拘らず独逸が負けると申して居りました。日本対米英の戦争の原因についても私は次の如く考えて居ります。米国には少数ではありますが清教徒<sup>(42)</sup>以来の信仰的に正しい部分がありまして後から入ってきた享乐的物質的部分と闘って参りましてこの両勢力の消長<sup>(43)</sup>が米国の歴史に見られます。日中戦争前は後者の勢力が勝って居りましたが、日中戦争以来弱い中国が日本の為に苦しめられているのを助けなければならないという声が次第に強くなって参りまして、いや日本に武器を売って儲けた方がいいという声と闘って次第に勢力を得て参りました。日中戦争の為に米国の道徳信仰が目覚めて参りました。一例をあげますと映画の如きも享乐的なものが、少なくなり道徳的になって参りました。エジソン<sup>(44)</sup>伝、パスツール<sup>(45)</sup>伝、リヴィングストン<sup>(46)</sup>伝等が製作され日本でも観られました。そして遂に経済断交となり太平洋戦争となりました。それで道徳的判断により日本が負けると結論致しました。1941年（昭和16年）の暮れから1942年（昭和17年）の春にかけて日本が絶対不敗の態勢を整えたと号して<sup>(47)</sup>居った時にも私はこの考えを変えませんでした。これも不幸にして偉い政治家や学者の考えどおりにならないで信仰を持っている以

外には取り柄のない私の言うとおりになりそうであります。以上の私の観察も誤っているかも知れませんが、これから後の事実が解決致します。

また天皇を如何に観るかの答えの要点は次の如くでありました。

私は天皇を超人間的な方とは思いません。私共と同じ人間でいらっしゃいます。病気もなさるし、食物を召し上がらなければ御飢えにもなられると思って居ります。しかしこれは天皇に対する愛と尊敬を少しも減じは致しません、否神として敬遠するよりも強いのであります。また事実私は信仰を得ない子供の時からそう教えられて参りました。日本の国体の美わしきは天照大神様<sup>(48)</sup>を共通の先祖とする一大家族国家であるという点にあると教えられて参りました。天皇陛下は全国民の父、皇后陛下は母であらせられ、国民は赤子<sup>(49)</sup>であると今に至るまで信じて居ります。軍人の立場からも同じでありまして、軍人勅諭<sup>(50)</sup>にも「朕<sup>(51)</sup>は汝等軍人の大元帥<sup>(52)</sup>なるぞ朕は汝等を股肱<sup>(53)</sup>と頼み汝等は朕を頭首と仰ぎてぞその親しみは特に深かるべき」とあります。私共軍人以外の一般国民は股肱より下の手の指足の爪でありましてもとにかく日本という美しい国の一部分であるという自覚は喜びを与え責任の大なるを痛感せしめます。天皇を神とする思想は極く近頃流行して来た悪しき風潮であります。日本古来の国体の美を破る許すべからざるものであります。世界の歴史を見まするに国の元首<sup>(54)</sup>を神として礼拝せしめた例は二、三ありまして、いずれも国の乱れの基となって居ります。その一番著しい例はローマ帝国でありまして皇帝礼拝を強制致しましたところが不思議なことにはローマ皇帝は初代のカエサル・アウグストゥス<sup>(55)</sup>は暈の上で死にましたが二代のティベリウス<sup>(56)</sup>は変死、三代のカリグラ<sup>(57)</sup>は殺され、四代クラウディウス<sup>(58)</sup>は毒殺され、五代のネロ<sup>(59)</sup>は自殺致しました。これでユリウス家<sup>(60)</sup>の血統は絶えて、他の者が皇帝になりましたがその後も血生臭いことが絶えませんでした。所謂国体明徴運動<sup>(61)</sup>は貴い日本の皇室をローマの皇室の如き忌わしいものにする最も悪しきものであります。現在の困難はこの思想から生じました。道德の頹廢もこの神でないものを神とする不合理の当然の結果であります。

検事は何とかこじつけて有罪にしようと致しまして、特高課の方は間に挟まってお気の毒でありました。再臨の信仰の中に、即ち再臨のキリストを人と見なして他の人を天皇以上にすることに不敬罪<sup>(62)</sup>を構成せしめようと骨折ったようでありましたが、キリストは神であり神なるキリストを天皇より上に置くことは決して不敬にならぬと頑張りました。私はまた再臨のキリストが霊のみでなく体をも持ち給うこと、

しかもそれが普通の肉体でないことを理解せしめようと努め<sup>つと</sup>ました。それで解決は延々<sup>のびのび</sup>になるばかりでありました。

春風<sup>い</sup>に送られて家を出でしかど 獄舎<sup>ひとや</sup>の窓に秋風ぞ吹く

秋風<sup>こが</sup>が木枯らしになってもまだ帰れませんでした。当局は私を非戦論と信仰<sup>ゆえ</sup>の故に拘留<sup>こうりゅう</sup>しているといえ<sup>うわさ</sup>ばみっともないのでスパイという噂<sup>うわさ</sup>を振りまきましたので当人等<sup>とうにん</sup>は監房<sup>かんぼう</sup>内で尊敬<sup>けい</sup>され比較<sup>ひかく</sup>的優遇<sup>ゆうぐう</sup>されて居<sup>お</sup>りましたが、留守<sup>るす</sup>の家族は村人<sup>むらびと</sup>から何かと迫害<sup>はくがい</sup>されて苦しみました。しかし私は一度もスパイ等という調べは受けたことはありませんでした。

特高<sup>とっこう</sup>の調書<sup>ちょうしょ</sup>も出来<sup>のびのび</sup>ましたのになお延々<sup>のびのび</sup>になり、やがてクリスマスも参りました。

馬小屋<sup>たま</sup>に生まれ給<sup>みどりご</sup>いし嬰兒<sup>(63)</sup>は 獄舎<sup>ひとや</sup>にさえも来<sup>たまわ</sup>り給はん

折<sup>おり</sup>から監房<sup>かんぼう</sup>内に居<sup>い</sup>合わせた飢え<sup>う</sup>ゆえに<sup>あやま</sup> 過<sup>あやま</sup>ちを犯<sup>じょじ</sup>した女児<sup>じょじ</sup>ともう一人の少年<sup>せうねん</sup>と共に渡部<sup>わたなべ</sup>様<sup>かんぼう</sup>の監房<sup>かんぼう</sup>で家<sup>か</sup>から送<sup>ごちそう</sup>られた御馳走<sup>ごちそう</sup>を共に食<sup>く</sup>べつつクリスマス<sup>クリスマス</sup>を祝<sup>いわ</sup>いました。暮<sup>くれ</sup>れも押しつまって検事<sup>けんじ</sup>が転任<sup>てんにん</sup>になりまして、正月<sup>しょうげつ</sup>早々<sup>そうそう</sup>仙台<sup>せんだい</sup>福島<sup>ふくしま</sup>等<sup>とう</sup>から検事<sup>けんじ</sup>を出張<sup>しゅさつ</sup>せしめて調べる<sup>しら</sup>べることになり、急速<sup>きゅうそく</sup>に事<sup>こと</sup>が運<sup>は</sup>びまして検事<sup>けんじ</sup>の調べも2月2日<sup>に</sup>に済<sup>す</sup>みました。私<sup>わたし</sup>としてはこれまで苦勞<sup>いた</sup>致<sup>いた</sup>しましたのですから起訴<sup>きそ</sup><sup>(64)</sup>されて公判<sup>こうはん</sup>廷<sup>てい</sup><sup>(65)</sup>で天下<sup>てんか</sup>に所信<sup>しよしん</sup>を述べたいと思<sup>おも</sup>って居<sup>お</sup>りましたが、2月12日<sup>に</sup>の夕<sup>ゆふ</sup>突然<sup>とつぜん</sup>釈放<sup>しゃくほう</sup>され、14日<sup>に</sup>に雪<sup>ゆき</sup>に埋<sup>う</sup>もれた吾家<sup>わがや</sup>に帰<sup>かえ</sup>り、当人<sup>とうにん</sup>以上に喜<sup>よろこ</sup>ぶ家族<sup>かぞ</sup>に迎<sup>むか</sup>えられました。

8ヶ月<sup>はつげつ</sup>の間健康<sup>けんこう</sup>も害<sup>そこな</sup>わらず、信仰<sup>しんぎょう</sup>をもまげず弱<sup>よわ</sup>き私<sup>わたし</sup>としては充分<sup>ぶんぶん</sup>に福音<sup>ふくいん</sup>の証<sup>あかし</sup>をなすことが出来<sup>でき</sup>ましたのは奇蹟<sup>きせき</sup>とも言うべきでありまして、これも主<sup>しゆ</sup>の御護<sup>ごまも</sup>りと家族<sup>かぞ</sup>、友人<sup>とも</sup>の熱<sup>あつ</sup>き祈<sup>いの</sup>りによるのであるとただ感謝<sup>かんしゃ</sup>に溢<sup>あふ</sup>るのみであります。

(「聖書の日本」129号、1946年12月)

### 3-2 戦争放棄の光栄

1946年（昭和21年）12月8日、東京女子大学講堂における新日本建設基督教講演会キリストにおいてのべたもの

本日は大東亜戦争だいとうあ<sup>(66)</sup>の始まった日であります。今私共がなめている苦痛も、受けている屈辱くつじよくも皆5年前の今月今日に由来しているのであります。これが昨年8月15日降伏こうふくの日から始まったと考えるのは浅い見方でありまして。この戦争の始まりから今日こんにちの如くなることは明らかでありました。もし神が実在たまたまし給い、生きて居給い、全世界を支配して居給うならば不義であった日本や独逸が勝つ筈がありません。私は当時自分で情勢じょうせいを検討致しまして、この戦争は日本が正しくないから負けると結論致しました。如何に日本の軍備が米国アメリカに優まさって居ても必ず負けると確信致しました。科学的経済的判断よりも道徳的信仰的判断の方が確実ほうであります。緒戦しよせん<sup>(67)</sup>の勝利に全国が酔おって居りました時に緒戦に惨敗したということが何といたっても米国アメリカが戦争をしたくなかったことを一番よく現わしているからこれが米国が勝つ最大の根拠であると考えました。

私共少数の友人達は皆かく考えて参りました。ある一人は「この戦争でもし日本が勝つなら伝道を止める。神は正義いまで在し給わないから、自分の信仰が誤あやまっていたのだから止める、二、三年山の中にでも入って信仰の建て直しをしなければならぬ。」ときえ申しました。これ位の確信がなければ伝道は出来ません。ある伝道者は戦争中日本は勝つ勝つと居りまして敗戦になって意外だったと一言いって伝道おを続けて居ります。ひどい人は戦争中は戦争を謳歌おうかして居って今は平気で平和と民主主義を説いて居ります。しかしこれではいくら立派なことを言っても駄目だめであります。たとえキリストの福音ふくいんを説いても日本は救われません。何千という人が感激しても駄目だめであります。真理ならばたとえ一人も聴く人がなくとも野に叫んだのでも日本を動かします。私共は眼前の成功を欲しません。喜んで「パン」を水の上に投げます<sup>(68)</sup>。

事実神は生きて居給いました。強い、勝つ筈の日本と独逸が負けました。「活ける神の御手に陥るは畏るべきかな」であります。ごまかしはききません。現在は神の御手の最もはつきりと見られる時であります。今度の戦争は正義の神の実在をはつきりと示しました。恐ろしいことでもあり有り難いことでもあります。神にそむき不義を犯すことは恐ろしきことではありますが、正しくなりさえすれば神が護まもって下さるからであります。

現在の苦痛くつじよくと屈辱くつじよくはこの戦争と共に始まったのであります。12月8日は日本にとり苦痛の日屈辱の日であります。この苦痛の日屈辱の日を変えて喜びの日光栄の日となすものは信仰であります。「御旨により召されたる者の為には凡てのこと相働あいはたらきて益えき」<sup>(69)</sup>となります。キリストの福音ふくいんは水を変えてブドー酒となし得る<sup>(70)</sup>のであり

ます。

日本のどこを見ても希望がありません。絶望でないとしても、どうにかなるであろうという諦めが全国を覆って居ります。政治家にも学者にも確信がありません。大蔵大臣<sup>(71)</sup>はインフレーション<sup>(72)</sup>は来ないだろう、来年位は生産が好転するだろうというのみであります。しかしキリスト信徒は希望を持って居ります。悔い改めさえすれば、必ず神が恩恵を注いで下さいます。如何に現在の苦痛が烈しく、屈辱がであろうともやがて喜びの時光栄の日が来るのであります。この敗戦の苦痛と屈辱により日本人の傲慢が破られ魂が打ち砕かれ、神の御前に謙遜になれるならばこの敗戦の苦痛と屈辱も神の大いなる恩恵であります。神の愛の答であります。もう十日早く戦争が終わったならこれ程苦痛は烈しくなかったであろう。一ヶ月早く終わったなら苦痛と屈辱は半分ですんだであろうと思われます。しかし、ここまで来なければ悔い改めないとなれば、最もよい時に終戦になったのでありましよう。その後の政治がよくない為に苦痛が増しましたがこれも恩恵でありましよう。愛なる神は日本の為にも最善をなして下さいます。

この戦争の為に多くの人が生命を失いました。多くの人が親を失い、子を失い、夫を失いました。この流された血、孤児の涙、寡婦<sup>(73)</sup>の涙を活かす為にも悔い改めてこれらの犠牲を希望の基、光栄の基としなければなりません。これが私共、後に残ったものの務めであります。殊に<sup>(74)</sup>信仰あるものの責任であります。

敗戦の苦痛と屈辱とのどん底においても恩恵は満ち溢れているのであります。如何に神が恩恵をあたえ給うかを推しはかることは冒瀆ではありません。弱き人間に勇氣と希望とを与える為に愛なる神はこれを許し給うでありましよう。

神が敗戦日本に与え給うた恩恵の一つは戦争放棄であります。戦争は悪しきものであること、悲惨なものであることは軍人でさえも認めて居ります。ただ悪の行われる現在、国を護る為に止むを得ないとみて許されているのであります。そして止むを得ないとしてなされる戦争準備が戦争自身が悪であります。故に悪しきことに使われるのであります。防禦に名をかりて侵略戦争が行われるのであります。平和の為に軍備が侵略戦争の為に軍備となるのであります。国を護る為に武力が国を亡ぼすものとなります。これは歴史上の動かすべからざる事実であります。誠に「剣をとるものは剣にて亡ぶ」<sup>(75)</sup>のであります。そして主の御言の如く柔和なるものが地を嗣いで居ります<sup>(76)</sup>。アッシリア<sup>(77)</sup>、バビロン、ベルシャ<sup>(78)</sup>、マケドニア<sup>(79)</sup>、ローマと例外なく歴史はこれを示して居ります。武力をもって大きくなるなり方が烈しければ烈しい程速く亡びて居ります。

戦争によって何故国が亡びるのでありましようか。それは戦争そのものが大きな罪であるからであります。戦争によってその国の最もよいものを失います。戦争による最大の損失は道徳上の損失であります。戦争によって如何に物質的利益を得ても精神



的損失を償うのに足りません。戦時において犠牲的精神や愛国心等強調せられるにも拘らず戦争となると道徳が衰えます。これは実に不思議な現象であります。戦時に高調<sup>(80)</sup>せられる敵に対する憎悪はやがて味方同志にも及びます。これも戦争の害の大なる一つであります。また人的損失も戦争の害の大きな事由であります。戦争によって国民の中の最良の部分が失われます。戦場にて斃れるのは最も勇敢な人です。真面目な人が多く戦死致します。これらの損失も物的戦利品が如何に多くとも償うことは出来ません。戦争に勝った国がやがて亡びるのはこれらの理由であります。

こんなに害がはっきりして居りながら人類は戦争を止めませんでした。戦争は賭博の如く人をひきつける魅力を持って居ります。一時的ではありますが物質的利益、そしてこれに伴う栄誉が大でありますから、ついにまどわされて戦争に走るのであります。昔程戦争の利益が大でありました。負ければ非常に悲惨でありましたが勝てばその利益はまた非常なものでありました。その為に払った犠牲等は言うに足りないのであります。昔の凱旋將軍の栄誉は大変なものでありました。ローマ時代の凱旋式の模様はこれをよく現わして居ります。

神は人類に道徳的に戦争を止めさせようとなさいました。戦争が道徳的に悪しきものであることを教え給いました。しかし利益に惑わされた人類はこれに従いませんでした。それでも恵みに満ち給う神は人類を見捨て給はず、戦争が物質的にも利益のないようになさいました。負ければ勿論勝っても昔のような利益のないものにし給いました。近代戦は消耗戦であります。国家総力戦であります。莫大なる物質を消耗致します。それで勝って敵のものを根こそぎ奪って来ても戦争の為に消費したものを償うことは出来なくなりました。戦争の特質として何が何でも勝たなければなりません。それで武器の進歩も命中率をよくして効果を収めるといふよりも多量に発射して効果を得るといふ方が容易でありますのでその方向に進みます。少しでも効果の多い方へ多い方へと水の低きに流れる如くに進みますので物の経済等といふことはおかまいなしに消耗戦へと移って行きます。消耗戦といふことは御互いの破滅だといふ事がわかっていても、その方に悪魔に引きずられる如く突進してしまうのであります。これがまた戦争に対する神の刑罰であります。戦争の悪しきものである一つの証拠であります。第一次世界大戦の時勝ったフランスや英国が、負けた独逸に劣らず苦しみました。今次の大戦で勝った英米でも消費したものを取り返そうとは初めから考えず、賠償問題でも荒らされた国々の復興に少しでも役立てばいいという程度であります。

戦争が古代の非常に割のいいものから近代の引き合わないものに移った時期は、大体ナポレオン戦争<sup>(81)</sup>であります。ナポレオンも初期には財政の窮乏を、ひと戦争して、多額の償金を奪って来て、救うことが出来ましたが、後には出来なくなったよ

うであります。戦争は、道徳的に悪であります、経済的にも悪となりました。それにも拘らず戦争を止めません。実に呪われたるものであります。戦争が経済的にも引き合わないものになったということは何という神の恩恵ではありませんか。これにより非戦論者の運動が楽になりました。私共のもう一奮発の努力により戦争をなくすることが出来るであります。また今度の戦争により全国力が大ならば軍備は少なくても勝ち得ることが実証されました。戦争の場合には国力さえ大ならば泥縄<sup>(82)</sup>でも宜しいのであります。国力を無駄にする不経済な軍備を平時しているよりも、それをしないで国力を養っておく方が国を護るのに有効であることが立証されたから絶対非戦論を納得させられなくとも軍備をなくせませす。仮に相手国の七割の軍備があれば国が護れるとして、その余力を国力充実に使う方がよいとなれば、これまでは外国より少しでも強い軍備をしようとしたのが、反対にその七割にしようとして、相手国より少なくします。その国でもまたその七割にしようとして少なくします。それでこれまでの如き軍備拡張競争でなくて軍備縮小競争が起こり得るであります。平和ならしむるものの活動が為し易くなりました。

侵略戦争は悪いが防禦の為の戦争は止むを得ないではないかという人があります。しかし防禦の為にでも戦争は不可であります。防禦の為の戦争は侵略戦争よりは少しはいいであります。しかし戦争でありますので戦争の害はそのまま持って居ります。

第一防禦としてもまことに無効であります。せいぜい 50% くらいの防禦力しかありません。絶対優勢なる軍備を持っていれば 100% の防禦力があるように考えられて居りますが、戦争の如き複雑な現象は簡単にそうはいえません。結局勝つか負けるか二つに一つの場合になってしまいます。これに反し神に頼り国を護ることは 100% 確実であります。この場合にも聖書の教える無抵抗主義が最後の勝利を占めます。無抵抗の勝利であります。

多くの場合無抵抗の態度だけで侵略戦争は防止出来ます。抵抗しないところへ如何なる乱暴国でも戦争をしかけることは出来ません。相手国の良心に訴えれば正しい要求ならば必ず通ります。喧嘩両成敗でありまして戦争となるには、しかけられる方にも弱点があるのであります。よし<sup>(83)</sup> また万一无抵抗であって戦争をしかけられ国土を乱暴国によって蹂躪されることがあっても乱暴国は長く続くものではありません。間もなく亡びてしまいますので速やかに旧に復し<sup>(84)</sup> ます。

今度の戦争でも無抵抗であったデンマークは痛められ方が少なくほとんど終戦と同時に旧に復しましたけれども抵抗した英国は勝ちましたが復旧がなかなか出来ず非常に困って居ります。やはり神に護っていただく方が確かであり安全であります。デンマークが被害が少なかったのは英米が犠牲になってナチス<sup>(85)</sup> を倒したからであるという人があるかも知れませんが、これは神の御力を知らないものの言であります。

神は英米が防禦戦争をしなくともナチスを亡ぼし得給います。信仰のない歴史家でさえも国を亡ぼすものは敵国ではなくて国内の墮落であると申して居ります。

国家民族の膨張の為に戦争は必要であるといいますが、軍備に費やす努力の何分の一かで人口問題も食糧問題も優に解決出来ます。また他民族を押しつけてその犠牲によつての膨張は不義であります。

正しい主張でも力がなければこれを通すことが出来ない、故に軍備は必要であるとの考えも誤つて居ります。力は正義ではありません。正義が力であります。真に正しくないから武力の支持を必要とするのであります。真に正しくさえあれば必ず正義は通ります。

国を護るに無力であり、しかも悪用され易く亡国の基となる軍備は非常な負担を国にかけます。財政上の負担の大なるは明白なことであります。産業上の損失も重大であります。軍備は産業を助長するといいますが、真に国民生活に必要な産業ではありません。科学や技術を進歩させるといいますがこれも事實は反対で、却つて科学や技術の進歩は阻害されます。米国における 200 インチの望遠鏡の完成が七年以上も遅れました。多分原子力の平和的利用もこの度の戦争で遅らされたと思います。徴兵制度は大なる無形の損失を国に与えます。鍛錬修養に最も大切なる時期に多くの青年を汚してしまいます。

無力な軍備に国家がこのような犠牲を払うことは実に不思議なる現象であります。軍備の為に無駄をせず、戦争に国力を消費しないならば国力の発展は大きなものであります。小国日本が日露戦争<sup>(86)</sup>に勝ち得たのは徳川時代三百年の平和の為に国力の蓄積の結果であるとある学者が唱えました。徳川時代の軍備というのは、武士階級の存在というのみで物的損害は少なく戦争準備というより青年の鍛錬、道徳の振起<sup>(87)</sup>に却つて貢献致しました。

軍備がなく、戦争しない為にこれからの日本はどんなに国力充実、国家興隆<sup>(88)</sup>に都合がいいかわかりません。今の日本は失意絶望の時ではなく、実は希望の時であります。敗戦の苦痛はありますがこの中に大いなる希望の種があります。

米国の軍隊は日本よりよいようであります。また軍隊を他国に駐屯させる害を出来るだけ少なくしようとしているようであります。しかしいくらよくとも軍隊は軍隊であります。その弊害を全然なくすることは出来ません。米国はこれから大きな軍備を持って行くであります。それはやがて米国を苦しめ困らせる基であります。日本はこの軍備がなくなるのでありますから、却つて今度の戦争で得をしているといえます。賠償はいくら多額であろうといつかは払いきれます。それを払ってしまえばあとは軍備なしの身軽で働けます。米国よりも遙かに条件がよくなります。独逸も軍備のない国になりましたが、あんなに国を痛めつけられた上であります。独逸程国を痛められないで軍備なしになる日本は最も得をした国といえます。

いま日本の各方面において戦争放棄を不安に思っているようであります。他国の賛同を待って初めて安全になれるから諸国に働きかけようという声があります。けれどもこれらの心配は無用であります。50%しか効果のないしかも多大の犠牲を要する軍備等なくとも少しも差し支えありません。諸外国が賛同してくれなくとも、正義の神に護って戴くのでありますので不安は少しもありません。こんなよいことをなぜ実行しないかと愛の故に外国に働きかけることはよいことではありますが、不安の為にする必要は決してありません。賛同してくれなければ単独でこの最も安全な正しい道に進むのみであります。これからは弱き人や無力な物に頼らず、神により頼み国を護るのであります。正義の国となり、正義の神に護って戴くのであります。国際紛争を軍備の背景によって解決しようとするのではなく正義の力によって解決しようとするのであります。大いなる名誉であります。

大きな武力を持つと真の正義の立場に立てなくなります。無理が武力の故に通じ得ると思えば悪に走り易くなります。軍備がなければ正しくなり易くなります。戦争放棄により真に正義になり軍備がない方が却って安全であることを実証することにより全世界から多くの悪の根源なる軍備を除き世界に真の平和を供することが出来ます。これまた大いなる光栄ではありませんか。「幸福なるかな平和ならしむる者」<sup>(89)</sup>であります。最高の祝福が待って居ります。恐ろしい戦争絶滅の主動力となるのであります。

戦争放棄は大いなる光栄であります。これが敗戦の結果神に強いられて為すのでなければ一層大いなる光栄でありましょう。しかしながら強いられてなすのでもよいことでもあります。光栄には変わりありません。一体弱き人間のするよいことである物に強いられてしたのでないことがどれ位あるでしょうか。私共の持っている信仰でさえも自分の力で得たと言い切り得る人が何人ありますか。皆「汝らの救われしは恵みによれり」<sup>(90)</sup>でありまして、愚かな頑固な魂を持った私共を恵みに満ち給う神が捉え、これを種々に導き下さって遂に信仰をわからせて下さったのではありませんか。神に強いられて信仰を与えられたのではありませんか。敗戦に強いられてで結構であります。強いられてでもこんな偉いことを決行し得る光栄は偉大なるものであります。要は真にこのよいことが実行出来るかどうかであります。私共日本人はこれからは神にのみ頼り、活ける神に我が国を護って戴き、軍備が全くなくとも安全であることを、否これが最も安全であることを実証致しましょう。今まで世界中のどの国でもやったことのない大きなことでもあります。大いなる光栄ではありませんか。戦争に勝って少しばかり領土を増すこと等は少しも光栄ではありません。否却って不名誉であります。

私達日本人は敗戦という苦痛と屈辱とを通してではありますが、戦争放棄という大いなる光栄を与えられんとして居るのであります。大いなる恩恵ではありませんか。

喜ばしいことではありませんか。この大きな真理を、軍備がなくとも国家が安全であることを、無抵抗が勝利を占めるというキリストの御教えを国際関係においても実証する光栄が待っているのです。国民として、人として最大の名誉ではありませんか。万一この為に無法な侵略国に亡ぼされても本懐<sup>(91)</sup>であります。その犠牲が基になって必ず理想は達せられます。個人の場合に国家に殉<sup>じゆん</sup>ずる<sup>(92)</sup>ことが名誉でありますならば国家も正義の為に殉<sup>じゆん</sup>ずることは光栄ではありませんか。Pereat mundus, et facit justitia<sup>(93)</sup>、世界が亡ぶとも正義をしてならしめよであります。不名誉な侵略戦争に失敗しても一億玉碎<sup>(94)</sup>しようときえしたではありませんか。それとこれとは雲泥<sup>うんでい</sup>の相違であります。何の思い残りがありますでしょうか。私は確信<sup>いた</sup>致します。神は必ず日本を護<sup>まも</sup>り給<sup>たま</sup>い、亡ぼし給<sup>ほろ</sup>わず、この大事業を遂<sup>と</sup>げしめ給<sup>たま</sup>うでありますように。

(「聖書の日本」134号、1947年7月)

### 3-3 戦争の愚かさ

1971年5月3日、八王子平和憲法記念キリスト教講演会においてのべたもの

旧日本陸軍で軍人に戦争技術を学ばせる為の本に「作戦要務令<sup>(95)</sup>」というのがあった。その中に「どんな馬鹿げたことでも繰り返し聞かされていると本当だと思ふようになる」という意味の言葉がある。諜報機関<sup>(96)</sup>を利用して敵を攪乱<sup>(97)</sup>せよ、また敵の攪乱に乗ぜられるなどということである。そして事実戦争というものが害あって益のないものであるにも拘わらず、昔からよいものであるように繰り返し宣伝されてきたので、多くの人々がそう思い込んでしまっている。日本ではこの度の敗戦で戦争の害が身にしみて感ぜられ、平和国家として更生しようとして、世界最初の平和憲法を作った。しかし宣伝に禍され、次第に戦争の惨禍が忘れられてきてもとの軍国主義に戻りつつある。真に憂慮にたえない状態である。

古代において闘争や戦争によって国家ができた。それ故権力を握った人々が戦争を美化しなければならなくなり、英雄崇拜的精神を煽り、また犠牲的精神を養うようにした。犠牲ということが戦争がもたらす唯一の麗しいものである。それ故これで戦争を美化しようとする。しかし仲々これが起こらないので無理に起こそうとして勲章を与えとか靖国神社<sup>(98)</sup>に祀るとかする。こんなことは何の意味もない子供だましのことであるがそれによって欺かれる。先頃アメリカで反戦デモが行われて、こんなものにはだまされぬぞと公衆の前で勲章を投げ捨てる人が沢山出たとのことである。

昔は戦争が大変儲かる仕事だった。勿論一時的であって、戦争で強大になった国はいずれも早く亡びた。戦争で強大になるなり方が大きければ大きい程早く亡びている。このことは歴史上の事実が明らかに示している。アッシリアもバビロンもペルシャもギリシャも早く亡びた。まことに「剣をとる者はみな、剣で滅びる」というキリストの御言の通りである。しかし一時的ではあってもとにかく儲かる仕事であった。勝つと沢山の分捕り物を持って帰る。ローマ時代の凱旋将軍の凱旋式はずばらしく豪華なものであった。奴隷を引き連れしたり、香をたいたりした。コリント後書 2 章 14 節はその光景を心に描きつつ述べられたといわれている。

しかし近代になるにつれて戦争が儲からないものになった。戦争というものは何をしても勝たなければならない、勝つ為には手段を選ばない。それで武器の発達も、精度をよくして百発百中にするというよりも、沢山発射してその中のどれかがあたるといようにする方が容易であるので、経済性を無視して弾丸を多量に消費するようになる。その他の物資も多く消費するようになる。沢山物資を消耗するようになって国家総力戦になる。従って戦争に金が非常にかかるようになる。それでいくら賠償

金をとっても、戦争で消費したものを償うことができなくなった。その上に負けた方も消耗しつくして何もなくなっていて賠償金を出すこともできない。勝った方も国土を荒らされて困ってしまう。

戦争が勝っても儲からなくなったのは大体ナポレオン戦争の頃からで、ナポレオンも初めは大蔵大臣が財政の危機を訴えると、よし一戦争してくると言ってオーストリアに戦争をしかけ、勝って沢山の賠償金をとってきて財政の危機を救うことができたようであったが、後にはそれができなくなった。また軍隊の強い国が必ずしも勝てなくなったのもこの頃からである。ナポレオンもスペインでは手を焼いた。スペインを占領して、自分の身内を王にして帰ると反乱が起こる。行って攻めると直に静まるが、帰るとまた反乱が起こるといふぐあいで大変困った。それでそういう戦争をゲリラというようになったのであるがゲリラとはスペイン語で小戦争の意味である。

戦争はすべて愚かなものであるが、歴史上最も愚かな戦争をしたのはフランスである。ナポレオンが欧州を席卷したことをフランス人はフランスの光栄と考えた。実は光栄でも何でもなく、フランス革命<sup>(99)</sup>がナポレオンの帝政に変わったことは恥であるのに、それを光栄と考えた。それ故ナポレオン没落後もフランス人はナポレオン時代を慕った。丁度日本人が明治時代を慕っていると同じであった。甥がその際に乗じてナポレオン三世として出現した。1848年の二月革命<sup>(100)</sup>以後彼はのし上がってきた。1848年大統領になり、1851年12月にクーデター<sup>(101)</sup>を行って1852年1月10年任期の大統領となり次いで12月皇帝ナポレオン三世となった。70年にプロイセン<sup>(102)</sup>と戦争開始、ベルリンに向かって進軍した。ところが非常な負け方をした。プロイセン軍はモルトケ将軍<sup>(103)</sup>の指揮の下に破竹の勢いでフランスに侵入し、一ヶ月半でセダン<sup>(104)</sup>を占領したら、驚くべきことに皇帝が捕虜になった。英雄を気取って前線に出て居ったのであろうが、ナポレオン程の軍事能力もなく、虚栄に捉えられて戦争をしたのでこの負け方をした。プロイセン軍はパリを包囲し、パリ郊外ヴェルサイユ宮殿でプロイセン王はドイツ帝国皇帝としての戴冠式を行なった。これはプロイセンにとり最も成功した戦争であったがこれも47年しか保たず、1917年第一次大戦中に崩壊した。もう一つの成功した戦争の例である日露戦争も40年後の1945年の敗戦で日本を滅亡に瀕せしめた。戦争は国を護る役に立たない。最もよく成功したといわれている日露戦争さえたった40年しか日本を支えなかった。支えなかっただけではなく、40年後の敗戦の原因であることは歴史家の等しく認める所である。日露戦争後の日本の墮落、軍人の跋扈<sup>(105)</sup>、経済成長、愚かな戦争への突入と軍国主義の陥る定石<sup>(106)</sup>どおりの道を歩んだのである。

侵略者があつたら無抵抗で侵略者のあばれるままにさせて置くのが一番賢い方法である。何の理由もなく侵略するような狂った<sup>(107)</sup>国は案外早く崩壊するから心配は要らない。それを恐ろしい侵略が起こるから軍備をしなければならぬといつて悪しき

政治家は国民をだまして戦争を誘発するようなことをする。そしてフランスのように光栄でないものを光栄と思い込ませて、国民を愚かな戦争に追いやるのである。

悪しき政治家はなお言う、「儲ける為に戦争をするのではない、イデオロギー<sup>(108)</sup>を護る為にするのである。」と。ベトナム戦争<sup>(109)</sup>はキリスト教を共産主義の魔手から護る為の聖戦であるというのである。しかしイデオロギーを護る為に武力を用いることは自らそのイデオロギーが誤ったものであることを示すことである。使徒行伝 5 章 38 節～ 39 節に「そこでこの際諸君に申し上げる。あの人達から手を引いて、そのなすままにしておきなさい。その企てや、しわざが、人間から出たものなら自滅するだろう。しかし、もし神から出たものなら、あの人達を滅ぼすことは出来まい。まかり違えば諸君は神を敵にまわすことになるかも知れない。」とある。言い換えれば、それが真理ならどんなに強力に弾圧しても滅ぼすことは出来ないし、真理でないなら打ち捨てて置いておいても滅びるということである。これはユダヤ教の学者ガマリエル<sup>(110)</sup>の言であるが実に偉い言である。今日アメリカ第一の神学者ラインホルド・ニーバー<sup>(111)</sup>が、戦後大統領の顧問をして居って、政治家が共産主義を武力をもって弾圧することの可否を尋ねた時に、共産主義は無神論で悪魔の子であるから武力をもって弾圧すべきだと答えたので、平気で原子爆弾、水素爆弾を作るようになった。それ故私は今日世界で抱えている原子力戦への不安のものはニーバーにあると思う。彼がガマリエル程の信仰を持っていたら、このような誤りはしなかったろうと考える。ガマリエルの弟子からキリスト教最大の伝道者パウロが出たのも偶然ではない。

ベトナムで共産主義勢力が強いのは北ベトナムの侵略の為ではなく、南ベトナム政府の腐敗の為である。初めのゴ・ディン・ジエム<sup>(112)</sup>政府の腐敗はひどいものであった。外国の援助を受ける者は腐敗しやすいようで、その後の政府もどうもよくない。それ故益々戦争が長びきアメリカが大きな失敗をするようになる。武力を使うことが自由主義を護る為にならないで、共産主義を助長している。

今日、金儲けにもならない、国を護ることに、イデオロギーを護る為にも役立たない愚かな戦争を何故するのか、これは実に不思議な事実である。そしてこれは経済成長の為である。人間の欲の為である。経済というものは勢いに乗って自然に発展するもので、止めようとしても仲々止まらないものである。その上人間に必要なものを多く生産する方向に成長しないで、儲かるものを生産するように成長して行く。人間が人間でなくなって、エコノミック・アニマルになってしまっただただ儲かるようにと考える。大量消費、大量生産になって、消費を増やすように努める。それで浪費は美德という言葉が流行させる。真に必要なもの、役に立つものは生産しないで、すぐにこわれそうな物、誇大広告をして売り易いものを生産する。生産が浪費を促進し、浪費が生産を促進する。こうして経済成長が起こるのである。そして原子爆弾の連鎖反応のようになって爆発してしまう。浪費を要求するのでどうしても戦争に



走りたがる。戦争は最大の浪費である。あらゆる物を消費してしまう。富国強兵ということが昔からいわれてきたが、富国と強兵とは離れ難いものである。経済成長はどうしても戦争につながるものである。昔は富国になる為に強兵策をとったが、今は富国になった為に強兵策を取るようになってきた。それで経済界の人々が軍備の必要を国民に訴えてきた。以前はその傀儡<sup>(113)</sup>である政治家に「国民は国を護る気概を持たなければいけない」といわせて居ったが、それでは手緩いと感じて財界人が直接いうようになった。愛国心に名をかりて、私腹を肥やそうというのである。

アメリカにおいても経済界が国を動かしている。アイゼンハワー<sup>(114)</sup>がケネディ<sup>(115)</sup>と交代する時に「私は軍人であって、軍部と産業の複合体を押しやるのに骨が折れたが、貴方は軍人ではないので、それを押しやるのにはもっと困るであろう。」といったということである。ケネディは無理に押しえようとしたから謎の死を遂げたのかもしれない。今日アメリカがベトナムの泥沼から抜け出すことができないのも軍部と産業の複合体の圧力の為であろう。

日本では現在は軍が小さいから、軍部と産業の複合体の力は大きくないが、官僚<sup>(116)</sup>と産業の複合体はもう既にできている。経済界で選挙費用を出して買収等の不正をして多く金を使った者が当選するようにし、それらの議員を操縦して財界が儲かるように政治をやらせている。そして官僚出身者を候補者に立てて、多く当選させて有力な地位に据える。官僚の古手<sup>(117)</sup>を天降り<sup>(118)</sup>人事で大企業に就職させ、大企業ではこれらを通して種々運動して、自分に都合のよいように政治をさせるというようになってきている。佐藤<sup>(119)</sup>でも池田<sup>(120)</sup>でも皆官僚の古手であって、財界と結びついて出世したのである。公害法を骨抜きにするとか、政治資金規正法を制定できないとか、官僚も国会も財界の思うままに動かされている。金を貰って金をくれた者に都合のよいことをするのは明らかに収賄<sup>(121)</sup>である。これを有罪になし得ないことは司法部が独立を失っていることを示す。財界に迎合しない裁判官は罷免<sup>(122)</sup>されるという状態になってしまった。三権分立が壊れてしまったのである。

それ故経済界が戦争を欲していれば戦争にならざるを得ない。官僚と産業の複合体は日本では非常に強力である。最近の日本の状況は真に憂慮にたえない。自主憲法制定ということが唱えられるようになったが、これ位矛盾していることはない。憲法を改めて戦争ができるようにして、その共産主義防衛の一翼を担わせようというのがアメリカの政策である。自主憲法を作れということがアメリカの押しつけであり、自主でなくて、日本の親アメリカ勢力から出ている。

戦争は国威宣揚<sup>(123)</sup>の為という考えがあるが、他国を侵略して領土を拡げることがどうして国威宣揚になるのか。戦争に付随する多くの悪事をし、多くの人に怨まれ、恥をさらして何の国威宣揚になるのか。戦争に行けば生命の危険にさらされる。その時に生命とか死の問題を真剣に考えて罪より救われようとする者も少しはあるが、大

部分は自棄になり、悪に走り、姦淫<sup>(124)</sup>、略奪、無辜<sup>(125)</sup>の民の殺戮を行う。戦争程国威を落とすものはない。真の国威宣揚は正しい国になることである。箴言 14 章 34 節に「正義は国を高くし、罪は民をはずかしめる」とある通りである。正義が力であって、力は正義ではない。それ故に力ある、戦争に強い国が早く亡びるのである。戦争に勝つことに対する最大の罰は国民が悪くなることである。すべての戦争が悪しく、愚かである。聖戦、義戦といわれるものでも悪しく愚かである。リンカーンは受けて立ったのであるがアメリカの南北戦争も悪である。今日アメリカで奴隷制度が形式的には廃止されたが実質的にはなお問題が残っているのも戦争に訴えた為であると思われる。

すべての戦争が悪であり愚かであるが経済成長の為の戦争が最も愚かである。金は儲かるであろうが却ってその為に禍を招く。戦争をすれば勝っても何の得にもならない。人類が五千年に亘って築き上げた文化を捨てて獲物を奪い合う為に棍棒で殺し合った原始に帰ることである。文字通りエコノミック・アニマルになることである。こんな馬鹿なことは決してしてはならない。財界人は欲に目がくらんでこんな愚かなことを考えるのであろうが、日本の国をこんなつまらぬことの犠牲にしてはならない。平和憲法は護り通さなければならない。戦争の愚かさを悟って戦争を止めるよう、もっともっと努力しなければならぬ。

(「聖書の日本」421号、1971年8月)

### 3-4 軍備との戦い

1978年11月3日、東京赤坂公会堂における文化の日キリスト教講演会においてのべたもの

私共は戦争が害のみあって、何の利点もなく国を亡ぼすものであることを主張して参りました。今日では戦争の悪なることをほとんどすべての人が認めていて、戦争をするとは言わなくなりました。しかし軍備は必要であると多数の人が考えている。そして今日、平和憲法を持っている日本が世界有数の軍備を保持するという状態である。

戦争はしかけないが侵略は防がなければならない、国民が殺されるのをただ傍観していることは出来ないと言って軍備をする口実としている。自衛の戦争なら国民は一人も殺されないかの如く考えている。そして仮想敵国<sup>(126)</sup>を作って、侵略される危険があるように宣伝している。

しかし何もない所へ突然ある国が侵略して来ると言うことはあり得ないことである。侵略するようにさせることが必ず侵略される側にもあるのである。個人ならある時突然気が狂って<sup>(127)</sup>刀を振り回して人を殺すということもあり得るが、国家が急に気が狂った国<sup>(128)</sup>になって何の争いもない国を侵略するということはあり得ない。国家の場合には他国を武力をもって侵略するようになるには前触れがある。必ず国際紛争があつて侵略戦争が行われるようになる。侵略戦争はしないが自衛の戦争はするという国家が実は侵略戦争をするのである。戦争をする両方の国家が自衛の戦争だと言っている。自衛の戦争だと言っても勝てば賠償や領土を奪い取って侵略になってしまう。自衛の戦争だと言っても相手になる以上は侵略戦争になってしまう。軍備を持っていると相手になるから侵略戦争をするようになる。いくら無理難題を持ちかけて来ても相手にならなければ戦争にならない。無抵抗の方が最後には勝つのである。無抵抗の方が損害が少ない。抵抗すれば勝っても大きな損害を受ける。

軍備のバランスがとれていると戦争にならない、戦争抑止の軍備ということが言われているが、これは誤りである。バランスが取れているから戦争になるので、バランスが取れていないで片方が負けるに決まっていれば戦争は始まらない。バランス・オブ・パワー<sup>(129)</sup>は19世紀以来唱えられて来たが戦争は度々起こった。いくら先進国の偉い政治家が唱えても抑止戦力というのは誤りである。絶対に戦争しない国があつて、その国が他国より優勢な軍備を持っていれば戦争は起こらないというが、絶対に戦争しない国はない。優勢な軍備を持っていれば、人間の弱さの故にわが儘になり、無理難題を持ちかけて侵略戦争を起こすようになる。軍備を持たないと外交上不利であるから持つという考えの人があるようであるが、実はこれがそのまま軍備を持ってはならない理由になる。軍備のバックで主張しなければならない外交問題は悪い要求であつて通らない方がよいのである。軍備大国がわが儘がきく故につい悪に走り、

その為に亡びるようになるというのが歴史の教える所である。

自衛の戦争というのも必ず国際紛争があって、戦争になる責任の一端は侵略を受ける側にもあるのである。

ついでに言うが憲法第9条の第2項は自衛の為の軍備は持っていいと言っているのだという説が日本でかなり広く行われているがこれは誤りである。第9条2項は誰が見ても陸海軍の戦力を絶対に持ってはならないと言っている所である。これを自衛の軍備は持っていいとこじつけるのは、第2項に前項の目的の為には戦力を持たないといっている、その前項の目的とは国際紛争の為というのであるから国際紛争の為でない自衛戦争のための戦力は持っていいとうたっているというのである。しかし国際紛争の為でない自衛の戦争があり得るだろうか。どんな無謀な侵略国の仕掛ける侵略戦争でもその前に多少の外交交渉があり、国際紛争が必ずあり、前に述べた如く開戦の責任の一端は侵略される方にもあるのである。国際紛争の伴わない自衛戦争はあり得ないから、第2項は自衛の為の軍備を認めているのではなく、自衛隊は明らかに憲法違反である。

このように考えれば、軍備を持つてはならないことは明らかである。軍備を持つていると必ず戦争をするようになる。そして戦争すれば勝っても負けても国が亡びる。大義名分に適った、最も成功した戦争と言われている1905年の日露戦争と1870年の普法<sup>(130)</sup>戦争との後、日本は40年後の1945年に、プロイセンの後身であるドイツ帝国は48年後の1918年に滅亡した。日本は滅亡して、平和国家として再生した筈であるのに、今日軍国主義国家に墮落しようとして、再び滅亡への道を突進しつつある。戦争すれば、勝っても負けても国が亡びるのであるから、何としてでも軍備を止めさせるように戦わなければならない。悪魔は戦争をさせて人類を墮落させようとしたが、戦争の害を人間が知りすぎていては悪魔にとって不利であるから、戦争はしないが軍備は必要であると思わせて、目的を果たそうとしているので、戦争を止めさせようという戦いが、軍備を止めさせようという戦いになって来た。

今日何故に滅亡に向かって突進するような軍備を愚かにもしようとするのか。その理由の第一は経済成長である。大多数の人は経済成長をよいことと考えているが、私は十年来経済成長は神の刑罰であると言ってきた。私にこれを示したのは聖書のイザヤ書である。その2章6節に「あなたはあなたの民ヤコブの家を捨てられた。」とある。捨てられたから後で述べるように経済成長をしたというのである。次に「これは彼らが東の国からの占師をもって満たし、ペリシテ人<sup>(131)</sup>のように占者になり」とある。この占師とは占星術者である。立派な星の学問を金儲けに用いて占星術に墮落させた人々で、学問を曲げて金儲けに使う学者を指すのである。次に「外国人と同盟を結んだからである」と言っている。外国と同盟するのも正義を守る為にするのではなく、金儲けの為に同盟するので、今日日本がアメリカと同盟するのも金儲けの為に、

中国と同盟するのが金儲けになると言うところまで敵視していたことを忘れて同盟するということと全く同じであった。なお続いて7節には「彼らの国には金銀が満ち、その財宝は限りない」とあり、非常に経済成長したことを言っている。事実、ウジヤ王<sup>(132)</sup>の時にユダは非常に発展したのである。引き続いて「また彼らの国には馬が満ち、その戦車も限りない」と言っていて、経済成長に軍備増強が続いて来ることを示している。丁度今日の日本の事を言っている如くである。経済学者でもなくて、2,700年後の日本にも当てはまる経済的洞察を述べていることは偉いことである。経済成長して生産が延びて行くが、消費がこれにつれて延びてくれないと困ってしまう。それで最大の浪費である戦争をしたがるのである。戦争まで行かなくとも、軍備は絶えず改良、更新して行かなければならないから、戦争はしない、軍備をするだけだといってもある程度一時しのぎが出来るので軍備増強に一生懸命になる。それで軍備増強が経済成長に続いて起こるのである。

それ故アメリカでは軍部と産業界とが手を握って国の政治を動かしている。それを軍産複合体という。今日では癌細胞と言われる。自分達ばかり大きくなって、身体全体を亡ぼしてしまう癌細胞のようだからである。今日アメリカで経済的に困っているのは軍産複合体の為にベトナム等で巨額の浪費をしたからである。

日本でも経済界の人々は政治家を財力で圧迫して、法律を曲げて軍備増強をし、自分が困るから増強するとは言わないで、国の為という仮面をかぶり、国民は国を護る気概を持って宣伝している。そして世界でも何番目かの軍事強大国にしてしまった。戦争は資本家をも苦しめるものであるのに、目先の利益の為に軍備を増強するのは悪魔に惑わされている為である。これらの事実を見ると、悪魔の存在を認めざるを得ない。悪魔がそうさせるのである。軍備に対する戦いは悪魔との戦いである。マルクス主義者は資本家との階級闘争であると言うがこれは誤りであって、資本家に悪いことをさせる悪魔との戦いである。マルクス主義者はこれがわからないで資本家と戦っているとほんとの敵が後から廻って来てお互いの間を裂く、離反させる、内ゲバ<sup>(133)</sup>が起こる。スターリン<sup>(134)</sup>の血の粛清<sup>(135)</sup>もその現れである。この点でも聖書の教えの方が真理である。エペソ6章11節以下「悪魔の策略に対抗して立ち得るために神の武具で身を固めなさい。」とある。この武具とは完全武装である。「私たちの戦いは、血肉に対するものでなく」即ち人間と戦うのではなく、「もろもろの支配と権威と、やみの世の主権者、また天上にいる悪の霊に対する戦いである。」この支配とか権威とか等は天使の階級で悪魔は墮落した神に背いた天使である。「それだから、悪しき日にあたって、よく抵抗し、完全に勝ち抜いて、堅く立ち得る為に、神の武具を身につけなさい。即ち立って真理の帯を腰にしめ、正義の胸当てを胸につけ、平和の福音の備えを足にはき、その上に信仰の楯を手に取りなさい。」真理、正義、平和、信仰をもって戦えと教えている。これらは防御の武器である。唯一の攻撃的武器は御霊の

剣、即ち神の言である。神の言、即ち聖書の言は最もよく悪魔を倒すことが出来る。それで最後に「御霊の剣すなわち神の言をとりなさい」という。キリストも荒野の試み<sup>(136)</sup>の時に聖書の言（三回とも申命記よりの言）で悪魔を撃退なされた。適当な聖書の言がない時には真理をもって戦えばよい。真理の帯を腰にしめとあるが帯は武装の基礎である。真理をもって武装すれば強くなれて、嘘と欺瞞そのものである悪魔をよく倒すことが出来る。聖書の言が最もよく悪魔を倒すことが出来るのは最大の真理だからである。「私たちは真理に逆らっては何をする力もなく、真理に従えば力がある」とある（コリント第二、13章8節）。真理に従えば真理に逆らう者がいくら力強くてもこれを負かすことが出来るのである。

先年「ベ平連<sup>(137)</sup>」の人々が日本最大の軍需工場である三菱重工の株主総会に髑髏のお面を被って押しかけて行ったが皆押し出されて何もすることが出来なかった。私はこれを聞いて惜しいことをしたと思った。髑髏のお面を被るなんて馬鹿なことはしないで、誰か一人が行って三菱重工社長の軍備必要論を打ちこわして社長を謝らせれば軍備との戦いに勝つことが出来たのである。ほんとに惜しいことをしたものだ。三菱重工の社長の軍備必要論は軍備戸締まり論である。軍備戸締まり論ぐらい間違った議論はない。戸締まりのない家はない、そのように軍備のない国家はないというのであるが、戸締まりのない家は沢山ある。独立学園の附近には戸締まりをしない家が沢山ある。私の友人でアメリカのフィラデルフィアの郊外の住宅地で一年生活した人があるが、そこでも大部分の家で戸締まりをしないとのことである。軍備戸締まり論は出発点から誤っている。大都会の場合にはどんな悪い人がいるかわからないから戸締まりの必要があるが、国家の場合には、地球上にどんな国家があるかわっているから、悪いことをしそうな国があったら、悪いことをしないように教えてやったらいい。悪いことをするのは自分の国を亡ぼすことだから、しなくなるであろう。

次に軍備は戸締まりにならない。どんなによく防護しても、相手の弾丸か、爆弾か、ミサイルは飛んで来るであろう。戦争に勝ったにしても、沢山の人命を失うことになりはしない。ただ負けた方より損失が少し少ないというだけである。軍備があれば味方は一人も死なないかのような錯覚に陥らせて、軍備をせよと宣伝するのである。生産物が消費されないと困るという目前の利益にくらまされて、自ら苦しむような誤りに陥るとは、どうしても悪魔に捉われていると考えなければならない。

軍備との戦いは、聖書が教える如く、悪魔との戦いである。悪魔に勝つには真理をもって戦えばよい。暴力をもって戦うことは悪魔に降参することである。真理をもって戦えば必ず勝つ。

（「聖書の日本」504号、1979年1月）

## 【 註・III章 】

- (1) 信仰を同じくする人。
- (2) (1893 ~ 1991)、1928 年に鈴木弼美が初めて叶水を訪れて以来、叶水地区における最良の理解者、協力者、支援者、同労者であり、鈴木弼美と共に治安維持法違反被疑で山形警察署監房に 8 ヶ月間拘置された。独立学園と同じ下叶水地区で農業を生業としていた渡部は読書家で、自ら短歌を詠む教養人だった。鈴木弼美と渡部の出会いについては、本書 8-3「柏木の頃」を参照のこと。
- (3) 現在の検察（官）。犯罪を捜査して刑事事件の公訴を行い、裁判の執行を監督する。
- (4) 強制処分の判決・決定・命令を記載した裁判書。召喚状・勾引状・逮捕状・捜索状・差押状など。
- (5) 国家体制の変革などを目的とする結社活動や個人的行為に対する罰則を定めた法律。1925 年公布、1928 年改正、1941 年全面改正。主として共産主義運動の抑圧策として造反者には極刑（死刑）主義を採り、言論・思想の自由を蹂躪した。1945 年 10 月、GHQ の指令により廃止。
- (6) 法令に反して罪を犯すこと。
- (7) 捜査機関から犯罪の疑いをかけられること。まだ起訴はされていないが、家宅捜索などの法的な手続きが開始されている状態。
- (8) 勾引。被告人・証人その他の関係人を一定の場所に引致する強制処分。
- (9) 刑務所・拘置所などで収容者を入れておく部屋。2005 年監獄法改正前の用語。現在では居房、居室という。
- (10) 特別高等警察。旧制で、思想犯罪に対処するための高等警察。内務省直轄で、社会運動などの弾圧に当たった。第二次大戦後廃止。
- (11) 勇んで心がおどること。
- (12) 世間に対する名誉。
- (13) 予定よりも遅れること。
- (14) 原書は縦組みであるため、原書の表記は左。
- (15) 詩歌や俳句で、題を決めないで自由に詠むこと。またその作品。
- (16) 縄をかけられている。逮捕されている。
- (17) 志を守ること。自分が正しいと思うことを守り通すこと。
- (18) 原文ママ。現代表記では初めて。
- (19) 日本のこと。
- (20) ラテン語で Athanasius Contra Mundum、英語では Athanasius Against the World。
- (21) 不思議な、神秘的な。霊妙な。
- (22) 今。現在。目下。
- (23) ニカイアは小アジア北西部の古代都市。現在のトルコのイズニク。ニカイア公会議は、325 年にニカイアで開かれたキリスト教最初の世界会議。ここでアリウス派は、子であるキリストは神より下であるとしてキリストの神性を否定する説を唱えた。それに対してアタナシウスは、キ

- リストの神性を重視し、三位一体説を主張した。この会議においてアリウス派の排除が決定され、カトリックの正統教義が確立された。アタナシウスは、教会の統一を目指す皇帝・コンスタンティヌス 1 世から圧力を受けてもアリウス派を拒否し、生涯を通して神とキリストの本質は同一であると主張し続け、司教在任中に五度追放された。
- (24) (295 頃～ 373) 古代キリスト教会の教父。アレクサンドリアの司教。
- (25) 東条英機 (1884～1948)、軍人・政治家。1941 年に首相となり太平洋戦争を開始。戦況の不利に伴い 1944 年に辞職。敗戦後、東京裁判で A 級戦犯となり絞首刑となった。
- (26) 太平洋戦争中の 1944 年 6 月～7 月、サイパン島で米軍と旧日本軍が激戦を展開、米軍が勝利した。サイパン島の占領によって米軍は航空基地を確保し、日本への本格的な空襲が始まった。
- (27) 小磯国昭 (1880～1950)、軍人・政治家。1944 年に首相。第二次大戦後、東京裁判で、A 級戦犯として終身禁錮刑になり、服役中に病死。
- (28) 木・石・土・金属などで作った像。信仰の対象とされるもの。神仏にかたどって作った像。それらを宗教的对象として崇拜・尊重するのが偶像礼拝 (崇拜)。
- (29) 世界の終末の日にキリストが再びこの世に現れること。
- (30) 国家体制。特に太平洋戦争終戦までは、天皇を中心とした日本の国家体制のこと。
- (31) 伊勢神宮。また格式の高い神社の称号。ここでは、天皇制や天皇を現人神とする国家神道のことと思われる。
- (32) 1928 年、旧日本陸軍 (関東軍) が列車を爆破し、中国の軍人・政治家である張作霖 (1875～1928) を殺害した事件。当時の日本政府は爆殺事件の真相を隠すため、満州某重大事件と呼んだ。
- (33) 1931 年 9 月 18 日、関東軍 (日本陸軍部隊) が柳条湖で南満州鉄道を爆破。これを中国軍の仕業と偽り、攻撃を開始した。満州事変は、この柳条湖事件から起こった日本による満州 (中国東北一帯) への侵略戦争。
- (34) 1936 年、日本の関東軍の援助のもと綏遠省に侵攻した内モンゴル軍が、傅作義が率いる中国軍に撃退された事件。これにより抗日気運が高まった。
- (35) 1937 年 7 月の事件をきっかけにして起こった日本と中国との間の戦争。はじめ日本政府は支那事変あるいは日支事変とよび、宣戦布告も行わなかったが、戦線は全中国に拡大、太平洋戦争に発展した。なお、原書の表現は、現在では適切でないため改めた。
- (36) 共産主義の侵入や伸展を防止すること。
- (37) 中国湖北省東部の都市。日中戦争初期、南京撤退後の国民政府所在地。はんこう、はんかおとも。
- (38) (1887～1975) 中国の政治家、中華民国総統。国民党政府最高指導者として抗日戦争を遂行。第二次大戦後、内戦に敗れ、台湾に退いた。
- (39) Hans von Seeckt (1866～1936)、ドイツの軍人。退役後、1930～1932 年に国会議員となり、1934～1935 年には南京政府の軍事顧問を務めた。
- (40) 第一次大戦後ヴェルサイユ条約で、バルト海への出口としてポーランドに与えられた、ドイツ本国と東プロイセンとの間にある狭小な地域の称。



- (41) ベルサイユ条約を基礎とする第一次大戦後のヨーロッパの国際秩序。敗戦国再起の防止を主な内容としたが、1930年代のナチスの台頭によって事実上崩壊。
- (42) 16世紀後半、イギリス国教会の宗教改革をさらに徹底させようとしたプロテスタントの一派。キリストの教えの遵守と清純な生活を理想とした。ピューリタン。
- (43) 衰えることと盛んになること。
- (44) Thomas Alva Edison (1847～1931)、アメリカの発明家・企業家。
- (45) Louis Pasteur (1822～1895)、フランスの化学者・細菌学者。
- (46) David Livingstone (1813～1873)、イギリスの宣教師・探検家。奴隷貿易の廃止に貢献した。
- (47) 言いふらす。自分で言う。
- (48) 皇室の祖先である神。皇室崇敬の中心の神。
- (49) あかご。赤ん坊。天皇を親とする時の人民の呼称。
- (50) 1882年に明治天皇が陸海軍人に与えた勅諭で、正式名称は「陸海軍軍人に賜はりたる勅諭」。軍隊の天皇直属をうたい、第二次世界大戦の敗戦まで旧日本軍の精神的中核だった。勅諭とは、明治憲法下で天皇が自ら下した告諭。勅語とは異なり、訓示的な意味をもつ。敗戦後の1948年、国会で教育勅語などとともに失効が確認された。
- (51) 天皇の自称。私。
- (52) 全軍を統率する総大将。明治憲法下、陸海軍の統帥者としての天皇の称。
- (53) 手足となって働く、君主が最も頼りとする家臣。
- (54) 一国を代表する資格を持った首長。
- (55) (前63～14)、ローマ帝国初代皇帝。旧名オクタウィアヌス(オクタ비아ヌス)。
- (56) (前42～37)、ローマ帝国二代皇帝。
- (57) ガイウス・カエサル(12～41)、ローマ帝国三代皇帝。カリグラ(カリギュラ)は小さな軍靴という意味のあだ名。
- (58) (前10～54)、ローマ帝国四代皇帝。
- (59) (37～68)、ローマ帝国五代皇帝。
- (60) ユリウス・カエサル(前100頃～前4)の家系こと。
- (61) 憲法学者・美濃部達吉(1873～1948)らによる天皇機関説に対する排撃運動。天皇機関説とは、国家の統治権は天皇ではなく法人である国家に属し、天皇は主権者ではなく、国家の最高機関だとする憲法学説。この国体明徴運動によって、憲法の立憲主義的解釈は否定され、議会の地位は低下し、軍部の地位が高まった。文字通りの意味は、天皇が国家体制の中心であることをはっきりと証明するという意味。
- (62) 天皇・皇族・神宮などに対して不敬の行為をする罪。1947年の刑法改正で削除。
- (63) 生まれたばかりの子。
- (64) 検察官が裁判所に起訴状を提出し、被疑者に対して刑の適用を求める提起をすること。
- (65) 公開の法廷。
- (66) 太平洋戦争の、日本側での当時の公称。大東亜(東アジア・東南アジアとその周辺地域)か

ら欧米の勢力を排除し、日本が中心となってアジア諸民族が共存共栄することを大義とした戦争。  
(67) 戦争の発端の頃の戦い。

(68) (新共同訳)「あなたのパンを水に浮かべて流すがよい。月日がたってから、それを見いだすだろう。(コヘレトの言葉 11 章 1 節)を念頭に置いた言葉と思われる。なお、この聖書箇所について内村は以下のように解説しており、この内村の解釈も鈴木<sup>かしょ</sup>の念頭にあったと思われる。つまり、無駄<sup>ほどこ</sup>にしか見えなくても決して無駄ではなく、むしろ愛を施すことは最高の善であるので、自ら進んで行うという意味で記したのであろう。

○人生の至上善は智慧に非ず、快樂に非ず、功績に非ず、惜むことなく施すに在りと  
彼は覚つた、汝のパンを水の上に投げよと彼は最後に叫んだ、世に無益なる事としてパン  
を水の上に投げるが如きはない、水は直にパンに滲込みて、浸されたるパンの塊は直  
に水底へと沈むのである、パンを人に与ふるは好し、之を犬に投げるも悪しからず、然  
れども之を水の上に投げるに至つては無用の頂上である、然るにコーヘレスは此無益の  
事を為せよと人に告げ自己に諭したのである、汝のパンを水の上に投げよ、無効と知り  
つゝ愛を行へ、人に善を為して其結果を望む勿れ、物を施して感謝をさへ望む勿れ、たゞ  
愛せよ、たゞ施せよ、たゞ善なれ、是れ人生の至上善なり、最大幸福は茲に在りと  
コーヘレスは言ふたのである。

○「汝のパンを水の上に投げよ、多くの日の後に汝再び之を得ん」、惜むことなく与へ  
よ、報賞を眼中に措かずして善を為すべし、多年を経て後に、或は今世を終りて後に  
汝或ひは再び之を手にするを得ん、望まざるに其結果を見るを得ん、(内村鑑三全集 22  
巻 p.41)

(69) (新共同訳)「ご計画に従って召された者のためには、万事が共に働いて益となる」(ローマ  
の信徒への手紙 8 章 28 節)

(70) ヨハネによる福音書 2 章に記されている、イエスが行った奇跡。

(71) 現在の財務大臣。

(72) 貨幣価値が下がり、物価が上がり続ける現象。

(73) 夫と死別または離婚して再婚していない女性。未亡人。

(74) 特に。とりわけ。

(75) (新共同訳)「そこで、イエスは言われた。「剣をさやに納めなさい。剣を取る者は皆、剣  
で滅びる。」」(マタイによる福音書 26 章 52 節) イエスが捕らえられた際の言葉。

(76) (新共同訳)「柔和な人々は、幸いである、／その人たちは地を受け継ぐ。」(マタイによる  
福音書 5 章 5 節) 山上の垂訓の一部。

(77) 前 19 世紀頃から前 7 世紀にわたって栄えた、古代オリエント最初の世界帝国。

(78) ペルシア。イランの旧称。

(79) ギリシア北方に位置した古代の王国。アレクサンドロス大王(前 356 ~ 前 323)がペルシア  
から北インドに及ぶ遠征により大帝国を築いた。

(80) 調子や気分が高まること。

(81) 1799 年 ~ 1815 年、フランスのナポレオン 1 世(1769 ~ 1821)時代に行われた戦争の総称。

- (82) 泥棒を捕らえて縄をなう。事が起こってからあわてて用意をすること。
- (83) そうはなりそうもないが、仮にそうだったとしても。たとえ。万一。
- (84) 旧に復する。昔の状態に戻る。
- (85) 国家社会主義ドイツ労働者党。ナチ党。ヒトラー（1889～1945）を党首としたドイツの政党。  
1945年ドイツ敗戦とともに崩壊。
- (86) 1904年～1905年、日本と帝政ロシアが満州・朝鮮の制覇を争った戦争。
- (87) ふるいおこすこと。盛んにすること。
- (88) 勢いが盛んになって栄えること。
- (89) (新共同訳)「平和を実現する人々は、幸いである」(マタイによる福音書5章9節)
- (90) (新共同訳)「あなたがたの救われたのは恵みによるのです」(エフェソの信徒への手紙2章5節)
- (91) かねてからの願い。本望。
- (92) ある物事のために自分の生命を投げ出すこと。
- (93) ラテン語の格言。おそらく、Fiat iustitia, et pereat mundus と記すのがより一般的と思われる。
- (94) 全力を尽くして戦い、大義のために潔く死ぬこと。太平洋戦争末期には、本土決戦による一億玉砕(約一億人の全日本国民が玉砕すること)が叫ばれた。
- (95) 旧日本陸軍が1938年(昭和13年)に作成した一般将校のための戦術指導書。要務とは、大切な務め。重要な任務。
- (96) 相手の情勢などを密かに探って知らせること。スパイ活動を行う機関。
- (97) かき乱すこと。
- (98) 東京都千代田区九段北にある神社。元は1869年(明治2年)、国家に殉じた者の霊を祀るため招魂社として創建。1879年に現在の名に改称。戦後、一宗教法人となった。
- (99) 1789年～1799年にフランスに起こった革命。封建的な旧制度と絶対王政を倒し、人権宣言を公布、ルイ16世は処刑され、共和制が成立した。
- (100) 1848年2月22日～24日、パリに起こった革命。これを契機としてヨーロッパ諸国に自由主義革命運動が勃発した。
- (101) 非合法手段に訴えて政権を奪うこと。
- (102) 英語名はプロシア。1618年に形成、1701年にプロイセン王国と改称。1815年ライン川中流域を得てドイツ統一の中心勢力になり、1871年ドイツ帝国を建設、帝国を実質的に支配した。原書の表記はプロシアやプロシャだが、現代の一般的な表記に改めた。以下同じ。
- (103) (1800～1891)、ドイツ、プロシアの軍人。近代ドイツ陸軍の父で、19世紀における最もすぐれた軍事指揮者の一人とされる。
- (104) フランス北東部の都市。スダン。
- (105) 思うままに勢力をふるうこと。また、のさばり、はびこること。
- (106) 物事を処理するときの決まった仕方。
- (107) 原書の表現は、現在では適切でないため改めた。

- (108) 歴史的・社会的立場に基<sup>もと</sup>づいて形成される、基本的なものの考え方。観<sup>かん</sup>念<sup>ねん</sup>形態。一般に、政治的・社会的なものの考え方。思想の傾向。
- (109) 1960年～1975年の北ベトナム・南ベトナム解放民族戦線とアメリカ・南ベトナム政府との戦争。
- (110) ファリサイ派の律法学者。パウロの師。
- (111) Reinhold Niebuhr (1892～1971)、アメリカの神<sup>しん</sup>学<sup>がく</sup>者。
- (112) Ngo Dinh Diem (1901～1963)、ベトナム共和国（南ベトナム）初代大統領。1955年国民投票によって大統領に就任し、親米反共主義の独裁を行ったが、クーデターにより暗殺された。原書では、ゴ・ディエンディム。ゴ・ジン・ジエムとも。
- (113) 操<sup>あやつ</sup>り人形。人の手先になってその意のままに動く者。
- (114) Dwight David Eisenhower (1890～1969)、アメリカ合衆国第34代大統領。第二次大戦中はヨーロッパ連合軍総司令官などを務<sup>つと</sup>め、戦後はNATO軍最高司令官を務<sup>つと</sup>めた。
- (115) John Fitzgerald Kennedy (1917～1963)、アメリカ合衆国第35代大統領。
- (116) 特に、政策決定に影響を与えるような上級の役人。
- (117) 使い古したもの。古くなった物、または人。
- (118) 退職した高級官僚が外<sup>がい</sup>郭<sup>かく</sup>団体や関連企業に相当の地位で再就職すること。
- (119) 佐藤栄作（1901～1975）、元総理大臣。総理在任中に沖縄返還が実現。1949年、首相在任中の非核三原則などの政策によりノーベル平和賞受賞。
- (120) 池田<sup>はやと</sup>勇人(1899～1965)、元総理大臣。高度経済成長を推進。
- (121) 賄<sup>わいろ</sup>賂を受けとること。
- (122) 職務<sup>や</sup>を辞めさせること。免職。
- (123) 国の威光<sup>いこう</sup>の盛<sup>さか</sup>んなさまを世の中にはっきり示し表すこと。
- (124) 不正な男女の交わり。不倫な情事。
- (125) 罪のないこと。
- (126) 近い将来に戦争の発生する危険が予想され、国防上作戦計画<sup>りつあん</sup>を立案しておく必要のある相手国。
- (127) 原書の表現は、現在では適切でないため改めた。
- (128) 原書の表現は、現在では適切でないため改めた。
- (129) 勢力が互いに釣り合っている状況。諸<sup>かん</sup>国家間相互に敵対・友好の複雑な関係を結んで牽制<sup>けんせい</sup>しあうことによって国際平和を保持しようとする国際政治の原理。勢力<sup>きんこう</sup>均衡。
- (130) 1870年～1871年、プロイセンを主とするドイツ諸邦とフランスとの間に起こった戦争。
- (131) 旧約時代、イスラエル民族と敵対関係にあった民族。
- (132) (在位・前783～742)、南ユダ王国最盛期<sup>さいせいき</sup>の王。
- (133) 組織の内部での暴力を伴う対立・抗争。ゲバはゲバルト（ドイツ語で国家権力に対する実力闘争の意）の略。
- (134) Iosif Vissarionovich Stalin (1879～1953)、ソ連の政治家。1922年以来共産党書記長。1930年代には大量<sup>しゆくせい</sup>肅<sup>じゆりつ</sup>清を行って個人独裁を樹立した。

- (135) 不正者・反対者などを厳しく取り締まること。独裁政党などで、方針に反する者を排除すること。
- (136) マタイによる福音書 4 章ほか。
- (137) 「ベトナムに平和を！市民連合」の略称。1965 年に結成された、ベトナム戦争を終わらせることを目的とする市民運動の組織。1974 年解散。